

都小研 会報

・発行所
 ・東京都小学校社会科研究会
 ・東京都板橋区大矢口上町 43-1
 ・発行人 石橋昌雄
 ・編集人 山田裕

東京大会に向けた授業の課題について

東京都小学校社会科研究会会長
 板橋区立板橋第十小学校校長

石橋昌雄



来年度の東京大会に向けて「よりよい社会の形成に参画する資質や能力を培う社会科教育」を自ら調べ・考え・表現しながら社会認識を深める学習を通して」の主題のもと五つの会場校と都小社研学年部会及び都内の区市で精力的に実践が積み上げられています。多くの授業を見せていただく中で、成果が具体的な形で見えているのはうれしいことです。その反面、これは改善が必要ではないかと思う授業もあります。いくつか例をあげてみたいと思います。

その第一は、言語活動そのものが目的になってしまっている授業です。「それでは話し合ってみましょう。」「互いに交流してみましよう。」と教師が指導します。しかし、子供たちは「何を、何分で話し合い、どのように表現するのか」の指示がないために、ただ自分がノートに書いたことを伝えて終わりという場面に会います。社会科の言語活動はあくまで社会認識を深めるための手だてと考えた方がよいのではないかと思います。

第二は、社会参画を急ぎすぎる授業です。社会認識を深めないうで参画意識を性急に求めても児童は理由も根拠もない行動化の言葉を言わされているだけです。じっくりと社会認識を深めていけば、おのずと地域や社会

に対する愛着が生まれ、参画意識に通じてくるはずで、第三は、完成された発表会のような授業です。よりよい発表内容をめざし、出来上がったものが表現されます。しかし、それでは問題意識も出てきませんし、疑問や矛盾も発生しません。社会科の授業としてはどうなのかと思います。むしろ完成していかないの方が、調べ・考え・表現する機会があるように思います。

東京大会まであと8か月となりました。これまでの調査研究部を中心とする研究推進委員の先生方や区市の研究會のご努力に感謝いたします。研究はもちろん運営面もこれからが本番です。先日行われました、板橋第十小学校での平成24年度都小社研研究発表会・東京大会板橋十会場プレ発表会)には、会場校講師の安野功先生、板橋区教育長橋本正彦様をはじめ、300名を超える先生方や都社研OBの方々にご参加をいただきました。今後6月7月にかけて他の会場のプレ発表会も予定されています。ぜひ多くの方のご参加とご助言を賜りますことをお願い申し上げます。

都小社研・研究発表会(プレ発表会)報告

東京都小学校社会科研究会調査研究部長
 立川市立第四小学校校長

月岡正明

本年度の都小社研研究発表会は、東京大会のプレ発表会を兼ねて板橋区立板橋第十小学校(石橋昌雄校長)で開催しました。当日は、東京大会の板橋第十小学校会場講師の國學院大学教授安野功先生をはじめ、ご来賓、都小社研OB・顧問の皆様、各区市の先生方など三百名を超える参加者がありました。

都小社研は、二年前より、「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う社会科教育」という研究主題のもと、研究を積み重ねてきました。本年度も、研究推進委員の各学年部会が、昨年度までの研究の成果と課題を踏まえて、いっそう研究を深め充実させるとともに新たな挑戦も行い、計十三本の授業実践を行うことができました。

六年部会は、全小社研高知大会での提案も行いました。さらに、今年度は、東京大会での五会場ごとの研究組織も立ち上がり、会場校の先生方と連携した研究もスタートしました。

研究発表会当日は、東京大会本番を意識し、会場校となる板橋第十小学校八学級で、会場校の先生と都小社研の研究推進委

員が公開授業を行った後、学年別授業提案を行いました。そして、全体協議会で、都小社研と連携した板橋第十小学校の研究について提案しました。

講師の安野功先生からは、東京大会に向けての期待ということで、3つの視点で指導・講評をいただきました。

①社会科らしい授業をやっている。社会科は、社会認識を深める教科である。社会認識を深めるためには、問う力を積み上げていくことが重要である。

②社会的な見方や考え方の育ちを見せてほしい。自分の考えを友達に問い、授業を全員で創り上げることは、社会的な見方や考え方を育てる第一歩である。

③「ふかめる」段階は、社会参画する資質や能力の育成を担う社会科として重要である。授業実践における子供の反応を分析し、「ふかめる」段階の有効性を検証し提案してほしい。

ご指導いただいたことを今後に生かしていきます。

第三学年

研究主題「よりよい地域に

したいと願う子供の育成」

～自分と地域の人々とのかわり～

とらえ、考えを深める指導の工夫～

一 研究のねらい

地域の社会的現象の意味や自分とのつながり・かわりを確かに理解し、地域社会の発展について願いや考えをもつことが、将来の社会形成に参画する資質や能力の基礎の育成につながる

二 実践の内容

○「商店の仕事を調べよう」

大型スーパーマーケットを主教材とし、明確な視点をもって二回の見学を行うことで、「店にたくさんお客さんが来るひみつ」について追究できるようにした。「ふかめる」段階では、周りの店舗が大幅に減少する中、長い間続いている個人商店の営みに目を向け、調査をすることで、地域の全ての商店が自分たち消費者のために様々な工夫や努力をしていることを理解し、ひい

ては地域社会に対する愛着の芽生えにつなげることができた。

○「まちの人々の仕事」工場ではたらく人々」

区内で最大規模の印刷・製本工場を主教材とした。調べる視点を「人・作り方・原料・届くまで」の四つに整理し、これに沿って調べ、まとめられるようにした。「ふかめる」段階では、区全体の工場に視点を広げ、三十五年前と比べて工場数が大幅に減少していること、その中でも個々の懸命な努力により長く続いている工場があることから、工場で働く人の思いや区の生産活動の今後の動向について考えさせることができた。

三 成果と課題

「ふかめる」段階で、「過去と現在のつながり」の視点をもたせられる教材を取り上げること、主教材で完結する学習よりも、地域への確かな認識を深め、地域について誇りに思う態度を培うことができた。今後は、社会参画への思いを見取る方法、そのための効果的な表現のさせ方を明確にしていきたい。

(中央区立明石小学校

主任教諭 川崎 義人)

第四学年

研究主題「よりよい地域社会について

考えようとする子供の育成」

～自分とのかかわりで地域社会

をとらえ、表現し合いながら

考えを深める指導の工夫～

一 研究のねらい

社会の形成に参画している人の姿が分かる教材を使い、人々の働きを共感的に理解し、地域的社会的現象と自分がどのようにかかわっていくかを伝え合ったり話し合ったりする活動を工夫することで、地域社会についての認識を深め、よりよい地域社会について考えようとする子供が育つと考え本主題を設定した。そのために学習過程ごとに目指す児童像を設定し、それに迫れるように「教材の開発」「指導の工夫」「評価の工夫」を手だとして研究を進めてきた。

二 実践の内容

○「ごみのしまつと再利用」

ごみ処理に携わっている人々の姿を具体的に調べ、自分たちの清潔で気持ち良い生活ができるのは、計画的・協力的にごみを処理してくれている人々の働きがあることをとらえた。「ふかめる」段階では、それまでの学

習と相反する新しい事実として、

収集されないゴミに驚き、「しまり」という別の角度からごみの

しまつについて考えを深め、さらに地域の一員としての自覚を

高めることができた。

○「自然を生かした

人々のくらし」高尾」

自然環境を保護・活用している地域として高尾の教材開発を行った。児童は、高尾の自然を大切に守る人々、高尾の活性化に努力する人々の姿から特色ある町づくりの様子をとらえた。

「ふかめる」段階では、高尾の豊かな自然が壊れつつあるという新たな事実から、高尾の自然を守りながら多くの人に高尾を楽しんでもらう方法を考え話し合うことで、地域社会への誇りや愛情をもつことができた。

三 成果と課題

「ふかめる」段階において、驚きのある新たな事実を提示することで、問いが生まれ、それについて考えることで、地域の一員であるという思いが高まった。考えを深めるための表現活動をさらに工夫していく。

(瑞穂町立瑞穂第四小学校

主任教諭 神尾 健彦)

第五学年

研究主題「よりよい社会について

考えようとする子供の育成」

～自分と社会とのかわりを実感

し、考えを深める指導の工夫～

一 研究のねらい

社会の様子についての確かな理解に基づき、これからの社会や自分の在り方を考え、これからの課題に対して関心をもち続けることが、よりよい社会の形成に参画する上で必要な資質の基礎であると考え、本主題を設定した。今年度は、「教材開発」「学習活動の工夫」「評価の工夫」を手立てとするとともに、単元終了後に期待する子供の姿の具現化を目指す指導計画作り

二 実践の内容

○「国土の地形や気候の特色と

人々のくらし」

本実践では、「地形」の特色ある地域として岐阜県海津市を、「気候」の特色ある地域として沖縄県の事例を取り上げた。特色ある地域の人々のくらしについて共感的にとらえ、国土への魅力を感じることができるよう、「人の姿が見える教材づくり」を意識して教材開発を行った。

また、問題解決的な学習の流れを重視し、予想を基に学習計画を立て、視点を明確にして、自然条件を克服したりくらしや産業に生かしたりしている人々の工夫や努力について具体的に調べた。「ふかめる」段階では、調べたことを外国人のG.Tに伝える活動を行った。また、G.Tから地形や気候について自国との違いや日本のよさについて話をしていたことで、子供たちが、国土の地形や気候の特色や国土で生活し自然条件を克服したり生かしたりしている人々について、共感的に捉え、日本の国土の魅力やよさを再認識できるようにし、国土への興味・関心を高めることができた。

なお、研究発表会では、医療を事例とした情報ネットワークの授業を公開した。

三 成果と課題

三つの手立ての工夫と期待する子供の姿の具現化を図る指導計画作りにより、育てたい子供の姿に迫ることができた。

今後は、「ふかめる」段階における評価の在り方について、さらに追究していきたい。

(大田区立久原小学校)

主幹教諭 木下 健太郎

第六学年
研究主題「よりよい社会を

つくる」とする子供の育成」
—自分と社会とのつながりを実感し、進んでかかわろうとする授業の工夫—

一 研究のねらい

社会とのつながりを強く感じる教材を提示し、適切な評価と指導を行いながら多様な形式の表現活動や社会認識を深める活動を工夫することで、共によりよい社会を進んでつくるようとする態度を育てる。

二 実践の内容

①天皇中心の国づくり

「ふかめる」段階で、大仏開眼会における天皇、民衆、外国の僧の思いを考えて話し合ったり、後の時代に大仏再建にかかわった人々の思いを考えて文章を書いたりすることで、聖武天皇や大仏に対する認識を深めた。

②活気あふれる町人の文化

「ふかめる」段階で、浮世絵の海外流出を防ぐために浮世絵を買い集めて公開している方や、浮世絵の技術を受け継ぎながら新しい作品を作り出している浮世絵師を取り上げることで、江戸文化を未来へ伝えていこうとする態度を

育てた。

③長く続いた戦争と人々のくらし

「私たちは戦争の記憶を未来へどう伝えていこうとしよう」という学習問題を設定し、「ふかめる」段階では戦争遺跡の保存活動をしている人々について調べること、戦争の記憶を未来へ伝え平和な社会を築いていくために自分もできることをしていこうと考える児童を育てた。

④私たちの願いを実現する政治

東日本大震災で大きな被害を受けた釜石市の取り組みを追究することで、政治は国民生活の安定と向上を図る働きをしていることを理解させていった。「ふかめる」段階では模擬市議会を行い、復興に向けて取り組むべき課題について話し合った。

三 成果と課題

社会の課題の解決に取り組む人々を教材にしたり、歴史的事象の意味を視点を変えて考えたりすることで、社会認識を深め、参画意識を高めることができた。今後はこれまでの実践から、社会参画の意識を高める効果的な方法を理論化していきたい。

(練馬区立橋戸小学校)

主任教諭 嵐 元秀

プレ発表会

指導・講評

國學院大学教授
安野 功 先生

東京大会に期待することが三つある。

一つは、『社会科らしい授業をやってほしい』ということである。社会科では、社会生活の理解、社会認識を深めるということが絶対欠かせない。社会を総合的に理解していくのが社会科である。社会科らしい授業をしていくためには、自分の頭と体を使い、問う力を鍛えなければならぬ。子供の問いが積みあがっていけば、よりよい社会の形成に参画する基礎につながる。今回の提案では、考えて、表して、積み重ね、社会を理解していくのである。よって、調べ、考え、表す力を育てていかなければならない。

「うですか。」とどんどん考えをうなげていった。これが社会を創っていく第一歩である。子供が自分の生活や経験を結びつけて発言したとき、教師は、それを大事にし、認め、社会への理解につなげていく。子供たちも生活者であるから、生活を語っていく。そのときに初めて根拠が必要になる。授業者は、この根拠をどのように出させるか仕掛けを考えなければならない。

最後に、『ふかめる』段階をどう考え、発表していくかである。社会科の王道を担う都社研として胸を張り、「ふかめる」段階を提案してほしい。社会認識を身に付け、社会に生きる人間をどう育てるのか、ここに社会科の教科としての役割、本質価値がある。公共の精神に基づいて考える教科が社会科である。社会形成・参画の基礎を養うのであるから、授業実践における子供の反応を分析し有効性を検証していく事が大切である。そうした実践研究を通じた提案性のある研究を大事にしてほしい。今日は、意義あるプレ大会であった。

二つは、『社会的な見方や考え方の育ちを見せてほしい』ことである。社会は、人と人が自分とのかかわりの中で創っている。一人一人が目的をもって、みんなが参加して社会を創っていくのである。今日の授業では、子供同士が意見を言い合い「自分ばかり考えます。みなさんど

(文責 葛飾区立西亀有小学校
校長 駒野 眞理子)

各地区の取り組み

千代田区 研究主題

「社会をみつめ、進んでかわろうとする子供が育つ社会科学習」
「自分の考えをもち、互いに深め合う表現活動」

新学習指導要領の完全実施を迎えた平成二十三年度から一年、学び、考えたことを友だちとの関わりを通してどう深め、表現していくかを中心にして研究を進めてきました。

三年生「昔の道具と暮らし」では、昔の道具は今も現役で生活を支えていることや、昔の道具のよさが今の道具に活かされていることを知り、昔の道具に対する考えを深め、感想を交流しました。

五年生「これからの食料生産」では輸入をするほうがいいのか国産のほうがいいのかと、自分たちの生活と密接な課題に対して、心情思考数直線を用い、数直線上に気持ちの変化を表し、根拠を明確にして自分の意見を友達に伝えました。

六年生「全国統一への動き」では、織田、豊臣、徳川の三人の武将を扱い、調べ学習してき

たことをまとめる部分で交流し合い、調べてきたことと、友達の意見を参考にし、根拠を明確にして自分が支持する武将を決めました。
これらの授業を通して学んだことを部員が自校で発信したり、成果と課題を明確にして次年度以降に活かしていきたいと思えます。

(千代田区立和泉小学校 主任教諭 川嶋 美武)

江戸川区 研究主題

「人や社会とのかかわりを通して、調べて考え、表現する力を育てる」

江戸川区では、児童は人や社会とのかかわることにより実感的に社会を認識できるのではないかと、そして、地域の一員としての自覚をもって社会参画するのではないかと考え、昨年までの研究主題に「人や社会とのかかわりを通して」という文言を付け加え、実践を行った。

江戸川区の北部・中部・南部とも、同じ研究構想図を基にして学習過程を組んでいるが、どれも問題解決型の学習過程を構成するよう意識している。

元東京学芸大学講師の新見謙太先生からいただいた、「調べて考える力とは、社会的現象を比較・関連・統合するなどの具体的な技術や能力である」とのご助言を、「調べて考える力」の観点を設定した。

- ①比較 ②関連 ③因果 ④統合 ⑤時間軸と空間軸 ⑥観点変更による多面的思考

そして、その学習活動を充実させるための手だてとして、i 教材の開発、ii 学習形態の工夫、iii 教師の指導と評価の視点を設定した。
地区ごとに、以上のような観点を、視点に基づいた実践を提案している。

(江戸川区立葛西小学校 教諭 辻 慎二)

東久留米市 研究主題

「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う社会科教育」
「子供が意欲的に取り組む問題解決的な学習の展開の工夫」

本研究部会は、若手教諭が多く、社会科を専門としていない教諭がほとんどであり、メンバーの入れ替えも大きい。そこで、問題解決的な学習の展開の基礎をしっかりと学び、日頃の

実践に生かすことを第一の目標として研究を進めている。今年度は以下の三実践を行った。

- ①三年「くらしをささえる水」
：普段の生活の中での水と自分との関わりに気付かせ、水道が供給されなかったら給食はどうなるのかという切実感から「水の旅」調べを行った。

- ②五年「工業生産と工業地域」
：夏季巡検で訪問した大田区の工場を事例として取り上げ、実際に工場の方を招き、仕事に対する思いに触れながら日本の工業のこれからを考えることができた。

- ③六年「わたしたちの願いを実現する政治」
：政治と児童の生活との関わりをとらえやすくするため、市内の河川の整備を教材化した。
今後とも日頃の授業に使える教材を開発していきたい。

(東久留米市立第二小学校 主任教諭 濱口 景子)

稲城市 研究主題

「地域素材の活用と言語活動の充実」

本市では、小学校と中学校の6年間を通した社会科の研究を行うため、小学校と中学校が連携して研究に取り組んでいる。

本年度の研究テーマは、次の二点に視点を当てて教材開発と授業実践に取り組んだ。

- 視点1 地域について理解と関心を深める教材の開発
視点2 自分の考えを伝え合うことにより、お互いの考えを深める学習過程の研究

【実践1】中学1年「地域調査」
調査活動後、地域の課題を見出し、その解決方法をポスターセッションという形で生徒が提案する学習活動を提案。

【実践2】中学2年「火山のめぐみと防災への取り組み」
自分の考えをまとめる段階、伝え合う段階、教師からの補足説明を加えて深める段階を経て、生徒が主体的に学ぶ学習過程を提案。

【実践3】小学4年「玉川兄弟と玉川上水」
家庭でのミニ水路作りを体験後、資料から玉川上水の工事の様子を読み取り、まとめる学習活動を提案。

今後、小中連携の利点を生かし研究を進めたい。

(稲城市立稲城第六小学校 教諭 寺田 美穂子)